



学校名：八王子市立横山第一小学校

氏名：岩井 裕子

●実践教科等：総合的な学習の時間、道徳、社会科

●時間数：25時間（総合21、道徳3、社会1）

●対象生徒：小学校6年生

●対象人数：40人

MONGOLIA

〔担当教科：小学校全教科〕

1 単元名

世界の国へとびだそう！

2 単元の目標（ESDの能力・態度）

【学習方法に関すること】

ア モンゴルの人々や、文化、社会について知り、世界の国々への興味・関心をもつ。（進んで参加する態度）

イ 学習課題について、収集した様々な情報を取捨選択しながら調べる。（批判的に考える力）

【自分自身に関すること】

ウ 自分自身の生活と外国とのつながりを貿易や技術協力などから理解する。（つながりを尊重する態度）

【他者や社会とのかかわりに関すること】

エ モンゴルにおける問題について理解し、解決するために互いの考えを尊重しながら伝え合う。（コミュニケーションを行う力）

オ 世界で活躍する日本人の姿から、自分の生き方について考える。（他者と協力する態度）

カ JICAのモンゴルへの技術協力や、日本が海外から支援されてきた過去を知り、「国際協力」のよりよいあり方について考える。（未来像を予測して計画を立てる力）

3 ESD（持続可能な社会づくり）の視点

多様性	相互性	有限性	公平性	連携性	責任性
-----	-----	-----	-----	-----	-----

ア 日本と世界の国々の文化などについて、相違点があることに気づく。（多様性）

イ 日本とモンゴル、また、世界の国々が互いに助け合っていることを理解し、つながりの大切さを学ぶ。（連携性）

ウ 国際交流や国際協力の事例から、行動するうえで大切なことは何か考える。（責任性）

4 単元の指導について

（1）教材観

- ・視覚的資料を用いた学習活動として、児童が主体的に活動に参加するために、フォトランゲージをとともに、モンゴルでの様子を想起しやすくさせる。
- ・他者の意見を尊重する態度を高めるためのグループ学習として、自分の考えをもつとともに、他者の考えも共感的に受け入れる態度を養うことをねらいとする。
- ・児童の「知りたい！」を中心に据えた児童主体の学習内容として、授業の振り返りごとに、「疑問に思ったこと、知りたいと思ったこと」をワークシートに記入し、次回の学習活動の流れの中で生かしていくことで、教師主体の学習指導から、児童が自ら学習課題を設定できる授業づくりを行う。

（2）児童観

本学級の児童は、新しい知識を得ることについて、素直に喜ぶ姿が多く見られる。しかし、自分自身の生活から得た価値観で物事を考える様子も見受けられる。モンゴルの遊牧民の生活を紹介する授業では、とすると、自分の日常生活とかけ離れた食生活に接したときに「汚い。」等の誤った理解をしがちである。そのような理解につながらないための配慮が必要である。

本単元に入る前に、八王子市が作成した国際理解教育プログラム「八王子の食卓から世界を知ろう」をもとに、日本の食糧自給率と小麦とエビの輸入先を予想する学習を1時間行った。小麦の輸入先である、オーストラリア、カナダ等はすぐ出たのに対し、エビの輸入先である、タイ、ベトナム等に

については解答が出なかった。これについて、「小麦の輸入先の国は有名だから知っている。」「エビの輸入先の国については、有名ではないのでよく知らない。」という意見が出た。このことから、児童の知識の偏りや日本と世界とのつながりに関する意識の薄さが窺えたので、本単元を通し、世界の多様性や、世界と日本との相互関係を児童に意識させ、視野を広げさせたい。

(3) 指導観

本単元の主題から、世界へとびだそうとする意欲を児童にもたせたいと考える。そのためには、世界の広さや多様性に関する多くの情報から、有益な知識を習得させることが重要である。そこで、遊牧民の生活の良さや工夫を正しく理解するために、『地球の食卓』を取り入れる。世界には様々な食文化があり、一つの国の中にも多様な生活様式があることに気づかせたい。第15時からの「一人一か国調べ」では、児童が生き生きと調べ学習に取り組めるよう、本校の図書室の本だけでなく、市の図書館から借り入れ用意する。

社会科では、学習指導要領内容(3)「世界の中の日本の役割」と関連させ、ODA や国際連合について学習する。世界における国際協力の取組を理解することで、本時の学習へつなげたい。

また、道徳の学習指導要領内容(4)の「主として集団や社会との関わりに関すること」に含まれている「国際理解、親善」の項目と関連付けて授業を行っていく。光村図書の副読本「きみがいちばんひかるとき」(6年)に収められている「ちがいをこえて」(第12時)と「ブータンに日本の農業を」(第14時)を扱い、外国の人々や国との関わりについて学習する。

本時で行う国際協力の授業において、児童に気づいてほしいことを、主に①お互いの国で支え合っているという相互性、②相手のニーズを考えた支援をしていくことの二点とした。本単元の指導を通して、児童一人一人が、世界へ目を向けつつ、さらに、互いの違いを認め受容する態度を養い、学校生活での友達との関わりの中で協力する姿につながることを期待したい。

5 評価規準

総合的な学習の時間の評価規準(社会科の評価規準及び道徳の内容項目も含む)

観点	学習方法		自分自身	他者や社会との関わり
	課題設定	思考・分析	自己理解	他者理解
評価規準	①学習活動を通して課題を設定している。 【2-ア, 3-ア】 ②世界の国々との国際交流や国際協力の様子に関心をもち、意欲的に調べている。 社	①課題解決に必要な情報を収集し、整理したり分析したりして思考する。 【2-イ】 社 ②日本と外国のつながりについて、思考・判断したことを、視覚的資料や言語で適切に表現している。社	①モンゴルについて学習してきたことを振り返り、自分の生活が外国と関わっていることを理解する。 【2-ウ, 3-イ】 ②他国の人々と共に生きていくためには、異文化理解が大切であること、我国が世界において果たしている役割を理解する。社 ③自分自身の生活を見つめ直す。〔道徳内容(4)〕	①課題解決に向けて自分の考えを伝えるときにも、友達の考えを尊重してコミュニケーションをする。 【2-エ】 ②どのように世界と関わっていくのか考えるために、友達の考えや協力隊員の活動への考えを参考にし、解決している。 【2-オ, 3-ウ】 ③相手の立場や気持ちになってものごとを考えている。〔道徳内容(4)〕
評価方法 (評価の視点)	①ワークシートへの記入 ・遊牧民の生活を探る。 ・ウランバートル市の生活を探る。	①ワークシートへの記入 ②調べ学習の様子の観察 ③作成した発表資料と発表内容 ・集めた情報を取捨選択している。	①ワークシートへの記入 ②調べ学習へ自主学習での取り組み。 ③一斉指導の場面での自分を振り返る感想、意見の発表。	①ワークシートへの記入 ②グループ活動の観察 ・主体的に参加しようとする態度。 ・コミュニケーションを行う姿。

【2- 】は単元の目標、並びに、【3- 】はESDの視点を示す。

6 単元の構成

時限	単元名	学習のねらい	授業内容
1	モンゴルの遊牧民	・モンゴルってどんな国？ モンゴルについて興味をもち、知りたいことや考えたことを表現することができる。	①モンゴルの国土や、人口、土地の様子などについてのクイズをする。 ②ゲルと道路の写真を用いてグループごとにフォトランゲージを行う。 ③モンゴルについて、さらに知りたいことをクラスのみんなに発表する。
2	の生活を知ろう	・遊牧民はどんな生活をしているの？ 遊牧民の暮らしに興味や疑問をもつことができる。	①民族衣装を着たり、ゲルの模型や写真を見たりする ②生活様式に疑問をもったり、日本の生活と比較したことをグループで伝え合う。
3		・遊牧民の生活の工夫を見つけよう 遊牧民の人々の思いや、生活様式の工夫を知り、共感的に考えることができる	①ゲルでのホームステイで撮った動画や、遊牧民の方のインタビュー内容を見る。 ②馬を大切にしている思いや、気候に合わせた生活の工夫をしていることなど、気づいたことをグループで伝え合う。
4 (道)		・学校に行くということについて考えよう 世界には、学校に行くことが難しい地域があることを知り、学校へ行けないとどんなことで困るか考えることができる。	①学校はどんなことをするところか考える。 ②学校に行けないとどんなことで困るか考える。 ③ロールプレイを通して識字の大切さに気づき、考えたことをワークシートに書く。
5	世界の国々の食文化	・『地球の食卓』 「国あてクイズ」 ・他の国に住む人々の生や食事について考えよう① 世界には、たくさんの国があり、多様な食文化があることに気づくことができる。	①「地球の食卓から」に載っている、世界の食卓の写真を見て、グループで一枚選ぶ。 ②選んだ写真に載っている、一週間分の食料の内容、家族や住居の様子から気づいたことを書き出す。 ③気づいたことをグループ毎に発表する。
6	を知ろう	・『地球の食卓』 「国あてクイズ」 ・他の国に住む人々の生活や食事について考えよう② 世界の多様性に触れるとともに、他の国に住む人々を身近に感じることができる。	①前時で選んだ写真について、どこの国の食卓なのか予想を立てる。 ②その国だと思った理由を述べる。 ③正解を知り、他のグループの選んだ国と似ている点や異なる点を探し伝え合う。
7		・『地球の食卓』 「国の中の多様性」 ・同じ国の異なる地域に住む人々の生活を見比べよう① 世界の食文化の多様性を知るとともに、同じ国の中にも多様性があることに気づくことができる。	①中国、オーストラリアの国の、それぞれ異なる地域に生活する2家族の写真を見比べ、似ている点や異なる点を探す。 ②違いが生まれる背景について考える。
8		・『地球の食卓』 「国の中の多様性」 ・同じ国の異なる地域に住む人々の生活を見比べよう② 個人の食生活には、国・地域単位の文化、歴史的・社会的な背景も影響していることに気づくことができる。	①日本の異なる地域に生活する2家族の写真を見て、似ている点や異なる点を探す。 ②同じ国でも、都市部と郊外や、文化などによって、食卓が異なることを理解する。
9	生活する上での問題点	・ウランバートルはどんな都市なの？① モンゴルの首都がどのような様子か知り、そこで生活する人々の特徴を衣食住から考えることができる。	①ウランバートル市の、交通、市場、デパート、日本食、人々の服装や髪型、高層ビル、火力発電所の写真のうち、一種類をグループで選び取る。(全8グループ) ②気づいたことを他グループに発表する。 ③ウランバートルの都市の様子と遊牧民の生活を比較しながら、考えたことをワークシートに記入する。

10		・モンゴルの国ではどんな問題があるのだろうか？	ウランバートル市郊外の道路、渋滞、ゲル地区やゴミ処理場の様子から、困っていることや問題点を考えることができる。	①ウランバートル郊外の、陥没した道路、大気汚染、ゴミ処理場、ゲル地区などの写真から、モンゴルでどんなことが問題になっているのか考える。 ② ①で出た問題について、どうしたら良くなるか考え、意見を出し合う。
11 (社)		・モンゴルの問題について、日本はどんなことをしているのだろうか？	ODA、JICA、青年海外協力隊の活動について知り、日本のモンゴルへの援助活動について考えることができる。	①ODA や JICA について確認する。(教科書下 P92～105.) ②太陽橋や火力発電所の建設、ゴミ処理場での作業車など日本の技術支援が入っていることを知る。 ③モンゴルで青年海外協力隊として活動されている方を紹介する。
12 (道)	広げよ 国際理解	・世界の人々と共に「ちがいをこえて」	相手の気持ちを大事にしながら、自分の意見を素直に伝えることで、互いに認め合える関係になると理解することができる。	①教材文を読み、人種の異なる友達との関わりと、日本人同士の友達との関わりとの相違点を探す。 ②他人と違った行動をする友達への関わり方について、全体で意見を出し合う。 ③一人一人違うということを受け入れ、どのように行動に表すか、全体で話し合う。
13 本時		・「国際協力」のあり方について考えよう	国際協力をするうえでの難しさに気づき、国際協力の必要性について考えることができる。 国際協力において大切な点は何か考えることができる。	①日本から海外への支援費と日本が抱える国債を紹介し、国際協力の必要性について疑問を提示する。 ②かつて日本も被支援国であったことや、震災のときにモンゴルなどの海外の国から支援を受けていたことを知る。 ③国際協力の必要性、また、大切にしないことについて考え、ワークシートに記入する。 ④グループ、全体で発表する。
14 (道)		・世界の人々と共に「ブータンの国に農業を」	ブータンの国に合った農業のあり方について真剣に考える西岡さんの姿から、国際協力で大切なことについて考えることができる。	①教材文を読み、ブータンがどんな様子の国なのか理解する。 ②西岡さんの活動や人々への思いについて考える。 ③国際協力において、大切なことは何か考え、友達と意見を伝え合う。
15 ～ 21	多くの国々を知ろう	・他の国について調べ、日本とのつながりを探そう！	他の国について興味を広げ、知りたいことや、日本とのつながりを調べることができる。 また、収集した情報を整理することができる。	①自分の興味をもった国を一カ国選び、国土の様子、産業、人々の生活について関連本やインターネットを活用して調べる。 ②日本とのつながりについて調べ、自分の意見をまとめる。 ③発表資料を作成し、原稿の準備をする。
22 ～ 25		みんなの調べた国を発表しよう！	友達の発表を聴き、自分の収集した情報を比較したり、世界の国の多様性に気づいたりすることができる。	①自分の調べた内容を、クラス全体に発表する。 ②友達の発表を聴き、世界の国の多様性や日本とのつながりに気づく。

7 授業事例の紹介

小単元名【「国際協力」のあり方について考えよう。】

(1) 指導案

(ア)実施日時 11月21日(金)第2限

(イ)実施会場 6-3教室

(ウ)本時の目標

・国際協力の必要性について考え、国際協力において大切な点は何か考えることができる。

(エ)指導のポイント

- ①研修で撮影した写真を用いて、視覚的な面から児童の思考を深めさせる。
- ②児童の多様な考えを引き出させるためにワークシートを活用する。
- ③グループ活動を通して、互いの意見を交流させる。
- ④ダムや新幹線等の写真を見せ、日本が受けてきた過去の国際協力を子ども達が身近に感じられるようにする。

(オ) 本時の展開 (PP…パワーポイント)

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
5 5 10 15 10	国際協力に当てている額や、支援国などについてクイズを出す。 東海道新幹線開業についての資料、モンゴルが日本へ義援金を送った記事を紹介する。 国際協力はどうしてするのか考える。 自分の考えを発表し、友達の考えを聴いて、さらに考えを深める。 今日の学習で考えたことをまとめる。	①国際協力に関するクイズについて考える。 ②かつて日本も被支援国であったことや、震災のときにモンゴルなどの海外の国から支援を受けていたことを知る。 ③どうして国際協力をするのか考え、ワークシートに記入する。 ④グループ、全体で発表する。 ⑤今日の学習から初めて知ったこと、疑問に思ったことなどをワークシートに記入する。	PP ワークシート グループ話し合い 全体発表 ワークシート	活動内容を簡略して紹介し、児童の思考を補助する。 日本が昔も今も世界の国から支援を受けていたことを知らせ、国際協力の必要性へ思考をつなげていく。 どのように考えたらよいか困っている児童に、補助資料を配付する。 友達の考えから、新たに気づいたことなどを、メモするように促す。 友達の意見も参考に、自分の意見との相違点を挙げるように促す。	ワークシート 【2ーウ、3ーイ】 グループでの意見交換を観察 【2ーエ】 【2ーオ、3ーウ】 ワークシート

(2) 授業の振り返り

日本が過去に世界の国々から支援をされていたことについて、児童が驚き、その後の話し合いが活気あるものになった。また、日本が開発途上国に支援しているだけでなく、日本も支援されていたことを知り、国際協力は相互に関わっていることを理解し、考えが深められた。

(3) 使用教材

パワーポイント

- ・資料：JICA「日本・途上国相互依存度調査」(2009年)
- ・写真：「CARE 基金」「黒部ダム」「東名高速道路」「東海道新幹線」
- ・新聞記事：「海外から日赤への義援金」(2013年4月4日2時10分朝日新聞デジタル)
「モンゴル 公務員日給分の募金呼びかけ」(2011年3月25日産経新聞)

(4) 参考資料等

- ・JICA「国際協力の目的について」〈<http://www.jica.go.jp/aboutoda/basic/01.html#a03>〉
(2015年1月10日アクセス)
- ・外務省「国際協力：政府開発援助 ODA ホームページ ODAとは？」(2015年1月10日アクセス)
- ・日本のODA 拠出先上位10か国(2012年)
〈http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/about/oda/oda_jisseki.html〉
- ・ODA ちよつといい話 二話〈http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/hanashi/story/1_2.html〉
- ・財務省「日本の財政を考える」〈<http://www.zaisei.mof.go.jp/>〉(2015年1月10日アクセス)
- ・国立教育政策研究所教育課程研究センター(2015年1月10日アクセス)
「総合的な学習の時間における評価方法等の工夫改善のための参考資料(小学校)」
〈http://www.nier.go.jp/kaihatsu/hyouka/shou/01_sho_sougou.pdf〉
- 「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料(小学校 社会)」
〈http://www.nier.go.jp/kaihatsu/hyouka/shou/02_sho_shakai.pdf〉

8 単元をとおした児童生徒の反応/変化

＜授業実施後の生徒の感想＞

- ・協力隊員を見て、他国で困っている人がいたら勇気をふりしぼって助けていきたいと思いました。
- ・学習前は、その国は貧しいのだな、としか思っていなかったけれど、学習後は少し助けてあげたいなと思えるようになった。少しでも、その貧しい国を助けられるチャンスがあるなら、少しでもいいから助けてあげたい。
- ・この学習をする前は全然世界に目がいきませんでした。けれど、1つの国を学習したら心に火がついてたくさんの国のことを知り、自主学習ノートでもたくさんの国を勉強しました。テレビのニュースで「○○国が・・・」というフレーズを見てしまうと、見入ってしまいます。ときどき、今外国ではどのようなことが起こっているのかな？と考えます。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

(1) 成果

ア 児童の変容について

- ・開発途上国について、「有名ではないから知らない。」という消極的な反応だった児童の半数近くが、一人が一カ国調べる学習に入るときに途上国や馴染みのない国を選択していた。また、日本も恩恵を受けていることを身近に感じさせることができた。
- ・モンゴルの学習に触発されて、一人が一カ国調べる学習が充実した。さらに、家庭で主体的に調べてくる児童も見られるようになった。
- ・道徳の授業から自分自身を振り返り、あまり耳慣れない国々の人々への関心が高められた。その国に暮らす人々の立場に立って考える活動を通して、自分の生活を見つめ直し、学級の他の児童を思いやる気持ちがさらに高められた。

イ ESD の視点による学習指導の成果について

コミュニケーションを行う力を培うために、毎回グループ活動を取り入れた。その結果、友達の意見を聴いて自分の疑問が解決する場面が表れた。また、日本と世界の国とのつながりを尊重する態度や学習課題に意欲的に取り組む姿勢が培われた。

(2) 課題

今回の実践では、児童の変容が見られた。今後、一層の充実のために次の3点を課題とした。

- ア 国際交流や国際協力に関する学習は、社会科、食育、道徳、さらにキャリア教育など多岐に渡るので、教育活動全体を通して横断的に実施できる年間導計画を立てていくこと。
- イ 日常生活への生かし方として、児童が自分自身の生活の中に、学んだことをどのように生かしていくのか、より具体的に想起して学習内容を計画していくこと。
- ウ 実際に海外で研修してきたことを踏まえ、当事者以外の教員でも使用できる教材作るとともに、学習活動の場を設定し、国際協力に関するよりよい学習活動を他の教員へ広げていくこと。

(3) 課題の改善策

- ・他教科、多学年の学習内容と関連付けた学習指導計画を立てることにより、研修に参加した教師だけでなく、他の教師や学校全体に広げていくことができると考える。
- ・児童が学習で得たことを、どのように生かし行動していくか、発達段階に応じて考えていく。
- ・現地で得た多数の写真や資料を精選し、どの教師でも利用しやすい教材を作成する。調べ学習では、知りたいことについて、一つの情報源に頼らないなどの指導方法を取り入れていく。

10 教師海外研修に参加して

これまで国際協力について授業をするたびに、自分自身の言葉で児童に伝えられるものが何もないと感じていた。開発途上国への知識や理解に欠けている自分が、このまま教えていいのだろうかと思っていたところ、本研修に参加することができた。初めてのモンゴルは、あっという間の10日間であったが、非常に多くのことを考えさせられた。日本と世界の国々のつながりについて深く考えるきっかけになり、国際協力に携わる人々の輝く姿を見つめながら、私は何ができるだろうかと反芻した。私の答えは、児童に何を学ばせ、どのような姿になってもらいたいのか考えながら授業をすることが国際協力だ。以前とは違い、児童に伝えられるものができたのが今回の研修の大きな成果である。